

蓴菜池にジュンサイが育つまで

蓴菜池にジュンサイを残そう市民の会会長

松田仁松

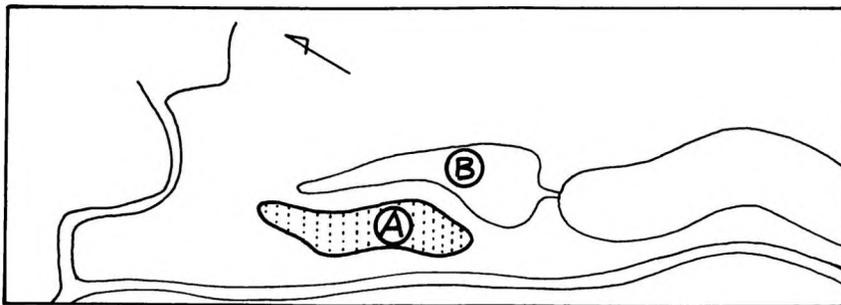
はじめに

私が市川市に住むようになって、18年になる。すぐ近くに自然の水生植物池をとり入れるべく計画された蓴菜池緑地公園がある。私は山形の生れで、ジュンサイは珍しい存在でないと考えていた。

しかし、ここの蓴菜池は、もともと水田灌漑用の溜池で国有地であったが、水中には、ジュンサイ、ヒツジグサがあり、ジュンサイは土地の物産になるほど豊富に生育していた記録が残っている(久内清孝 日記帳による)。

戦後一時水田となり、まもなく荒れ放題の状態が続いた。市当局は、該地を公園化すべく工事をすすめ、50年以降56年をもって、一応の整備を完了したとしている。しかし、かみて図面④、⑤の自然水生植物池の整備は、今後に残されていた。

56年6月になって、私たち池周辺の住民で組織していた「中国分4丁目環境を良くする会」の数名が、山形から譲りうけてきたジュンサイ約30株を、市当局の諒解のもとで④池の一部に試植してみたが、1ヶ月たらずで消滅した。57年7月、大滝末男先生に水生植物池の調査を依頼したところ、ジュンサイはコイやアメリカザリガニ(以後、ザリガニとよぶ)に食害を受けたほかに、約40mの深井戸による注水(200ℓ/分)の水質がpH=8.8を示し、とうていジュンサイの生育できるpH値ではないことが、判明した。そこで爾後、私たちはジュンサイ育成のために大滝先生の指導を受けることの諒解をえた。同時に、私は水草研究会の会員として入会させて頂き、水草の勉強をはじめた。57年秋、大滝先生のアドヴァイスにより、④池の一部に第2図に示すような、ジュンサイ育成の試験池を新しく造成するよう市当局に要望



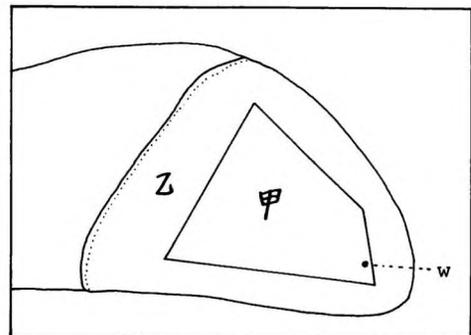
(上) 第1図 ジュンサイ池の位置

註 上図は蓴菜池緑地全体の1/3強、凡そ400m位である。④の方が、ジュンサイ育成池予定地、⑤の方が自生植物池

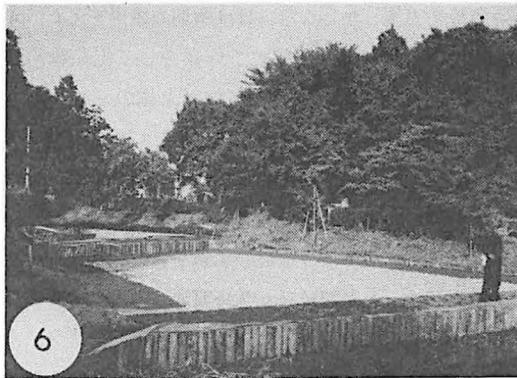
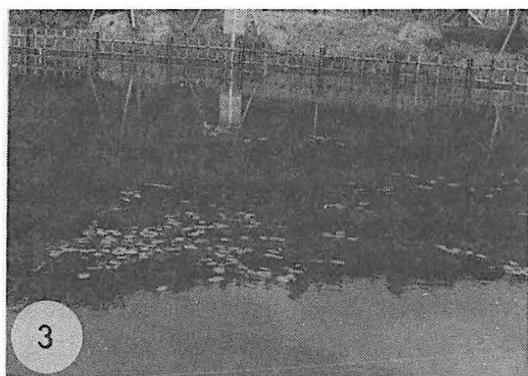
(右) 第2図 ④池の拡大図(1部)

(甲) 面積 190㎡ 水深 60cm
(乙) 面積 250㎡ 水深 20cm

W: 水道水を注水、底にバーク、ピートモス、山砂、赤土など厚さ10~15cm入れた。



した。その結果、58年7月中旬、私たちの希望どおりに工事は完了し、うえつけを開始した。その後の経過については、以下に示すが、60年度も順調に生育し、



第3図 58年8月31日 ザリガニの食害で漂うジュンサイ

第4、5図 59年8月24日 池全体に生育

第6図 水温調整池 注④池の一番かみて面積約300㎡・上下2段

今では関東地方では唯一のジュンサイ生育地として誇りうるほどに復活できたので、ここに報告する。

育成計画と実施状況

前述したように、56年春は失敗したが、同年秋、私たちは再度山形からジュンサイの苗をゆずりうけ、自宅で100鉢に苗をうえつけた。これらを発泡スチロールの箱に数個ずつ入れ、水道水や雨水で越冬させた。翌春、水槽内で、ジュンサイは順調に発芽、生長を続けた。この苗を6月になって、④池の2ヶ所に、1つは板わく、他の1つは網わく、それぞれたよこ1mを設置し、その中に鉢毎、水道水を入れてうえつけた。その結果、網わ

くより板わくの方が生長良好であった。

(1)昭和58年度

7月19日、1㎡につき、1株ぐらいの割で、(甲)区全面に約100株移植した。7月27日、30分間に52mmの集中豪雨にあい、周囲からの汚水も含めた泥水が入りこんで、試験池は全面的に水没した。8月1日、池中の泥水を汲みあげ、外部から入りこんだコイ、フナ、およびザリガニ多数を捕捉してよそに移したのちに消防車で水道水(pH=6.9)を入れてもらった。1ヶ月後、葉柄のついたジュンサイの葉が水面の諸所にふきよせられているのに気がついた(第3図)。10月31日、ポンプ排水して調べたところ、多数のザリガニや数匹のクサカメなど

によって、ジュンサイは根茎部まで食害され、皆無の状態になったことを知った。その時はザリガニをバケツ2杯ほども捕捉したが、改めてジュンサイの栽培は容易でないことを痛感した。このように58年度の試験栽培は集中豪雨によるアクシデントもあり、ザリガニを徹底的に駆除することが先決の問題になり、その対策を考究せざるをえなかった。

(2)昭和59年度

3月になって、穴居生活するザリガニの完全撲滅をはかる意味でポンプ排水(9日)によって水位15cmに下げたのちに、農薬バイジット乳剤投入(17日)によるザリガニ駆除を実施したところ、ほぼ所期の成果をえた。4月、田んぼのしろかきに類する作業をして土を軟らげ(26日)、自宅の水槽で栽培していた大株のジュンサイの苗を10グループほどに分けて移植した(27日)。58年は水深を80~100cmまで水位をあげたが、今回はジュンサイの生長にあわせ25cm位から徐々にあげ、最高水位は45~50cm止まりになるよう水位の調整をはかった。pH=6.8、水温16℃。5月26日(1ヶ月経過)順調な成育が見られ、水面の浮葉数は431枚に達した。pH=7.3、水温21℃、水深36cm。6月29日(2ヶ月経過)、浮葉数約800枚に達した。pH=7.3、水温20.5℃、水深35cm、透明度は良好。8月11日(100日経過)、試験池水域全面に広がる。pH=7.3、水温28℃、水深50cm、透明度は更に良好で水底まで見えた。幸い、59年は台風もなく、第4、5図のように池全面に生育した。このようなニュースは、NHKのテレビやいくつかの地元新聞にも公表された。なお、試験池の一隅に東京都水元公園で前年秋に入手した種子から自宅で育成したオニバスの実生苗を、3株試験的に植えてみたところ、9月に数個開花し、種子を採集することもできた。また、大滝先生の指示により、ザリガニの徹底的駆除対策として、天敵であるライギョを印旛沼漁業組合から購入して10数匹、試験池に入れた(10月4日)。

一方、私たちは、57年秋以来、池周辺の民家で現在、井戸水を利用して10ヶ所ほどの水質を調査していた。この結果、20mていどの浅井戸の場合、pH値はいずれも7.0以下であることを知った。そこで、市当局に対し、浅井戸の掘削を要請していたが、59年11月に深さ

11mの浅井戸を、深井戸の近くに試掘したところ、毎分35~40ℓの地下水をえた。この結果、pH=5.4、水温16℃の地下水は、ジュンサイの栽培に利用できることがわかった。

59年は、4年にわたる努力のすえ、漸く池の一部(190㎡)全面にジュンサイを復活させたのを機に、今後永く保全して私たちの子孫に残そうということで、周辺地域の住民はもとより松戸市、千葉市、都内の市民有志数百名をもって、10月14日、「専菜池にジュンサイを残そう市民の会」を発足させた。

(3)昭和60年度

60年は、ジュンサイは試験池全面によく生育したが、開花したものは皆無だった。この原因は、水道水による栄養分の不足が主要因でないかと考えられた。ジュンサイ以外のサジオモダカ、コナギ、ヒルムシロ、キクモおよびシャジクモなどの他の水草がさかんに繁殖し、ジュンサイの生育を阻止するようになったので、5月から10月にかけて数回、ジュンサイとオニバス以外の水草類の抜きとり作業を実施して、ジュンサイの繁殖をたすけた。11月に水道水から井戸水にきりかえるため、水道水を停止して、第6図のように、約300㎡の上、下2段の水温調整池を新しく市当局に工事をしてもらい、直径10cmのビニールパイプで育成試験池に注水し、現在に至っている。61年度には、④池全体にジュンサイを優占種に、ヒツジグサ、オニバス、コウホネなども生育できる往年の水生植物池の完成をめざして、さらに市当局とねばり強く交渉を続けている。終わりに際し、大滝先生には昭和57年以来、年間10数回もご足労をわずらわし、終始実施計画の指導をいただいたうえに、諸作業に直接ご協力いただいたことに対し、厚く御礼申し上げる。なお、本文中の写真は大滝先生の提供によるものである。また、ジュンサイを復活させるに際し、終始ご協力をいただいた市当局、ならびに多くの会員諸氏に対し、深甚の謝意を申しあげる。